

全科協ニュース

1974年9月1日発行
(通巻第19号)

全国科学博物館協議会

東京都台東区上野公園
国立科学博物館内
☎ 110
TEL.822-0111 (大代)

おもな内容 ◇今年度の博物館職員講習の実施内容きまる ◇特別展報告「人類の進化と旧石器」を終えて
鳥取県立博物館 山名巖 ◇全科協北から南から 斎藤報恩会博物館 斎藤温次郎 ◇会員館園の紹介 釧路市
青少年科学館

今年度の博物館職員講習の実施内容きまる

このほど、国立社会教育研修所で実施する今年度の学芸員資格取得のための博物館職員講習の実施内容がきまり、各都道府県委員会に対し通知された。この講習は、博物館職員の資質の向上を図るとともに、自然科学系の学芸員を養成のために行われているもので、単位修得の認定がなされた者は、試験認定の際試験科目の免除を願うことができることが、特典となっている。

今回は、前号でもお知らせしたように、諸般の事情により昭和49年度と50年度の2か年にわけて実施することになっており、本年度は、来る12月6日(金)から12月19日(木)までの2週間にわたって、博物館学3単位、社会教育1単位の計4単位相当分を行なうことになっている。受講資格は、これまで、博物館法施行規則第5条各号の1に該当するもので、登録博物館、ならびに文部大臣または都道府県教育委員会の指定する博物館に相当する施設に勤務する者となっていたが、今回は、これらの施設に準ずる施設に勤務する者で、国立社会教育研修所長が特に認めたものという項が追加され、さらに範囲がひろげられ受講しやすくなったので、全科協加入館園からも多数参加されることを期待してやまない。なお、昭和49年度講習の受講者は、昭和50年度も引き続き受講することを前提としており、本年度は単位の認定を行わないので、昭和49年度の資格認定試験は受験できないことになっている。

受講申込の方法は、所定の受講申込書、勤務証明書および所属長の承諾書を締切日〔10月19日(土)〕までに、住所地、または勤務地の都道府県教育委員会に提出することになっている。また、受講申込書には試験認定の受験資格を証明する書類を添付することになっている。詳しくは、都道府県教育委員会に問い合わせいただきたい。

なお、国が設置する施設の場合は、上記の書類を、国

立社会教育研修所へ提出することになっている。

その他、受講に要する経費として、受講者が所属する道府県庁所在地の最寄駅から東京駅までの運賃が支給されることになっている。

講習の日程および内容はおよそつぎのとおりである。

()内は講師 12月6日、午前、開講式およびオリエンテーション。午後、博物館の現状と課題(国立科学博物館長 福田繁)、12月7日、社会教育の意義・目的・内容・方法及び形態①(立教大学 岡本包治)、12月9日 社会教育の意義・目的・内容・方法及び形態②(岡本包治)、社会教育施設①(駒沢大学 中島俊教)、12月10日 社会教育施設②(中島俊教)、社会教育行政(文部省社会教育局)、社会教育指導者(文部省社会教育局)、12月11日 博物館の管理と運営①(国立科学博物館 吉田壽雄)、博物館の目的と機能①(国立科学博物館 鶴田総一郎)、12月12日 博物館の管理と運営②(鶴田総一郎)、博物館の目的と機能②(鶴田総一郎)、12月13日 資料の収集(理工)(国立科学博物館 青木国男)、人文博物館における資料の保管(東京国立文化財研究所長 関野克)、12月14日 資料の保管・分類目録(理工)(青木国男)、12月16日 資料の保管・分類目録(植物)(国立科学博物館 黒川道、金井弘夫)、資料の保管・分類目録(動物)(国立科学博物館、波部忠重、吉行瑞子)、12月17日 資料の保管・分類目録(人類化石)(国立科学博物館 鈴木 尚)、資料の保管・分類目録(岩石、鉱物)(国立科学博物館、加藤 昭)、資料の保管・分類目録(化石)(国立科学博物館、藤山家徳)、12月18日 資料に関する調査研究(自然史)(波部忠重)、人文系博物館資料の収集と調査研究(国学院大学 加藤有次)、12月19日 教育普及活動(国立科学博物館 手塚映男)、展示の目的と方法(鶴田総一郎)、研修の総括、閉講式。

特	別	展
報		告

特別展「人類の進化と旧石器」を終えて

鳥取県立博物館 山 名 巖

今回の特別展は、今一度、人間とはなにかという原点にもどって考えていただくために、猿人と呼ばれる原始的な人類から現生人類に至る約200万年の人類の道りを、自然とのかかわりあいのなかで解説展示したものである。

200万年というと途方もなく長い時間と思われがちであるが、地球の数10億年の歴史に比較すると、ほんのわずかな時間にすぎない。ほかの多くの動物が200万年ぐらいいでは、ほとんど進化していないのに人類に比べて急速な進化をしたことがうかがえる。この進化の要因となつたのは人類自身の文化であろう。

猿人が石を割って作った粗末な石器を持つことによつて文化が生まれた。その文化は後世に引き継がれながら、より精巧な石器文化へと発展していった。この文化は人類の生活様式に変化を与え、その変化は人類自身を進化させたわけである。

この特別展は学校の夏休みの期間中の7月28日から8月26日までの30日間にわたって開催し、その間に一万人余りの人々が見学された、見学者のほとんどが親子づれなどの個人見学者で、団体の入館者がきわめて少なかったのもこの期間の特徴であった。

この特別展を終るに当たって、見学の人々の感想やアンケートのまとめの一部を紹介したい。

ある中学校の先生は、この種の展示は当然のことながら汎世界的、汎日本的に資料を収集しなければならないが、よく集め、整然と展示されているのに驚いたと言っておられた。そして児童・生徒の夏休み中の生きた学習の場として利用することを望まれた。

ある歯科医さんは、ジンジャントロプスの臼歯の大きさと頭骨の突起を関連づけて感心しておられた。またある子供づれの主婦の一人は、野尻湖の発掘写真や標本を見ながら、かつて新聞で見た記憶を思い出して大衆による発掘の成果であると子供たちに説明しておられた。

ナウマンゾウの臼歯や牙、ヤベオオツノシカのツノに見入っている人々、インドゾウの全身骨格と化石骨を何回も見くらべる人々、旧石器をどうして作ったかと図板を読む人、黒曜石の細石器に感心する人、旧石器をメノウで作るのはもったいないと言う人などさまざまであった。

アンケートによる北京原人を知っていた人は約七割、同じく岩遺跡は四割、野尻湖の発掘は三割という結果がでた。そして、生徒や学生ほど高率を示した。このこ



とから、展示の内容があらましく知られており、それだけに関心の高いことを示しているものと思われた。そして、解説図板はほとんど読まれ、理解されていることもわかった。

しかし、なかには展示物が少ない、解説文が難しいという人もあった。学芸員の説明を聞いて初めてわかったという人もあった。

展示のシナリオからデザイン化まで、いろいろな制約の中で努力したかきがあつて、かなりの反響があつたのは事実であり、今後もこのような展示の開催を望む声が多かった。

最後になつたが今回の特別展の開催にあたっては国立科学博物館、野尻湖発掘調査団、尖石考古博物館、赤城人類文化研究所、瀬戸内考古研究室、広島大学考古研究室、山口大学古代遺跡調査室、さらに岡山県の山本慶一氏をはじめとする多くの熱心な収集家の協力が得られたものであることを明記して厚くお礼申し上げる。

今回の特別展の開催にあたって、上述のように多くの協力が得られたから成り立ったもので、博物館関係よりもむしろ大学や研究施設からの協力が必要であった。このことは今後とも自然史関係の特別展を企画するにあたっては避けられない宿命を感じる。

この点、美術を中心とする美術館、博物館は相互に連絡をとりながら美術品の所在調査や、相互協力による巡回特別展が企画されていると聞く。自然史や科学技術に関する展示は美術のように鑑賞を中心とする展覧会とは全く異質であるため困難さがあると思われるが、それにしても各館での特別展開催の動向を公表していただくと大いに参考になると思う。また、将来は全科協の手による巡回特別展が企画されることを望みたい。

 全 科 協 北 か ら 南 か ら

再 建 雑 感

齋藤報恩会博物館 齋藤 温次郎

今、齋藤報恩会博物館は再建中のため、休館中である。この再建に先立って、各地の博物館施設等を見学した感じを述べて見たいと思う。

私どもの館は終戦後今日迄、経済事情の悪化のため、十分な博物館活動が出来ず、僅かに研究報告の出版と、自然探究等の館外活動を実施し、多少の展示品を公開していたのみである。

齋藤報恩会博物館の開館は「昭和8年」であるが、この開館に至るまでの「大正12年」より約10年間は、資料収集等準備のための期間であった。報恩会は本来学術研究のための「助成財団」であるため、学術研究部で助成した各種の研究「レポート」の業績が、博物館の設立へと導かれたのであって、今日各地に新しく設立されている、各種博物館とはその設立の動機、出発点が多少異っている。

自然破壊が著しく進んでいる今日と違って齋藤報恩会博物館が発足した50年も前は、現在と比較にならぬ程自然状態が保持されていただけに資料の収集には充分の予算を使い、10年以上の研究実績をつみ、又海外財団との共同研究等の成果の上に立っての「自然史系博物館」をつくったので、本当に内容の充実した博物館であつたろうと想像される。それが現在、各地に新設される博物館は、せいぜい4・5年の準備期間で競うが如く開館して、事足りりとしている様に見えるのは、甚だ安易な博物館の乱造の様に思われる。大変失敬な表現であるが、一部の館を除いては特色のない博物館が続々と存在しているという感じが強い。この点再建中の私共の博物館も含めて、充分反省しなければならぬ事と思う。確かに、各地域に博物館（広義の）が無いよりあった方が好ましい事であるが、極論すれば、街で骨董屋があらゆる品物を並べてると、同様の感じのする博物館が存在するのでは、利用する観覧者の博物館に対するイメージダウンにつながるのではないかという気がする。

今日、国内はもとより海外等へも旅行する者が多くなり、諸外国の近代的な博物館等を見学して来て、博物館に対する認識を新たにし、そのイメージで、この程度の博物館に足を向けた場合、その差異の大きさに失望し、博物館に対する認識を過まらせる恐れがあるのではないかと感ずる。これからの博物館の在り方を相当考えねばならぬものが多いと思う。

博物館としての活動は、研究した成果を展示を通して

公開し、地域社会の教育の場として貢献しなければならぬ。博物館関係内部での難しい論議もさる事乍ら、展示の面で興味をもって観覧して貰うためには、一般観覧者の立場にたった考えも取り入れ、又もっと企業的な感覚をも取り入れた方がいい様に思う。今日、デパートの展示会や、博物館における特別展の入場者の多様性、又入場者の多さを見るにつけ、通常展示のあり方も、現代人の、本を読むよりテレビ、週刊紙、マンガ、に魅力を感じずる観客（あえて観客とよぶ）の立場にたった、日常性の強い博物館の展示と云うものを研究し実施すべきではないかと思う。

私共の博物館は、私立の法人であり、種々の制約のある公立の博物館よりは、その点多少自由な立場にあるので、何か「ユニーク」なものが出来ないかと思っている。だが余りにも変革というか、興味本位だと、博覧会的とか、見世物小屋のとか、邪道だとかの批判も出ると思われるが、とにかく一般利用者が来て貰えるような存在の意義のある博物館にしたいと願っている。

とにかく博物館内部でのアカデミックな研究は当然として、この成果の公開展示には少くとも、一般観覧者（私自身も含めて）が博物館とは楽しい所だ、見ている内に本当に勉強になった、今度の休日には又家族連れで出掛けて見ようと、気軽に行ける所にして見たいと思う。

余暇開発センターの調査によると、昭和55年の年間休日は、144日になり地域社会での生活時間が多くなると、博物館等の様なコミュニティー施設の重要度と必要性がますます予測される。この辺を充分考えた、現代のレジャーに即応した楽しい博物館にして見たいと思って再建に当たっている。

戦災で相当の重要な資料を焼失し、その後、活動もあまり実施しなかった当館としては、再建に当たって戦後より激しい今日のインフレの波に、資金の不足により大幅な計画の狂いを生じ、苦心している状態ですが、幸に今回、「畑井小虎」東北大名誉教授を館長に御願いして新博物館が発足する予定も定まり、現在は地学に畑井先生、奥津先生（東北大）、尾崎先生（元科博）、動物に、加藤東北大学長、伊藤先生（浅虫臨海実験所）、植物に、吉岡先生（東北大）の諸先生を専門委員として準備が着々と進んでいる。

終りに全科協の一員であるが、何等の御手伝いも出来ないのが大変残念であるが、将来を期するために再建に当たっているので、この際諸館園のよき御意見、アドバイス等、御支援賜われれば何よりの幸と、末尾乍ら、御願ひしたいと思っている。

会 員 館 園 の 紹 介

釧路市青少年科学館

所在地 北海道釧路市春湖台7番7号(春採公園内)
 ☎(085) 電話 (0154) 41-6225

道 順 国鉄根室本線釧路駅下車
 徒歩30分・バス10分(駅前乗車 科学館前
 下車徒歩3分)

設置者 釧路市(市教育委員会所管) 館長佐熊敏郎

開館時間 毎日午前9時から午後5時(入館4時)

休館日 毎週月曜日 国民の祝日 年末年始
 (月曜日が祝日と重なるときはその翌日も
 休館とする)

入館料 小中学生30円 高校生50円 大人大学生60
 円(団体割引30名以上1割引, 100名以上1.5
 割引 200名以上2割)

職員構成 館長 次長 主事 技師3 指導員3 そ
 の他の職員3 計12名

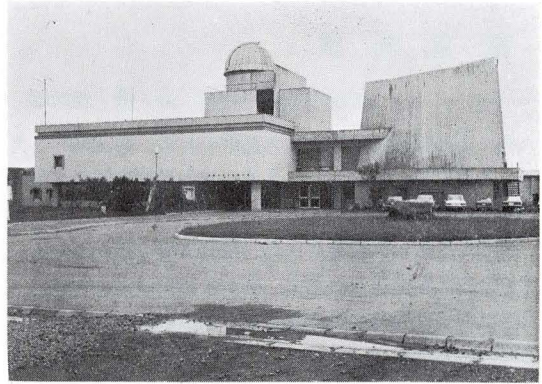
建物の構造 鉄筋コンクリート造り2階建1部4階
 延面積2,146平米

1階事務室 視聴覚教室 理科実験室2(物
 理化学) 準備室 工作室 機械室(ボイラ
 ー変電室) その他

2階展示室 プラネタリウム室 無線室 休
 憩室

3階機械室 4階天文台

沿革 北海道は道民の科学技術振興の一環として
 青少年の科学知識の普及啓発を通して開発
 意欲を培養することを目的に道内数館と共
 に昭和38年に開館した。以来小中学校児童
 生徒の理科実験学習や科学展示による一般



市民の科学知識の向上につとめている。

教育活動 (1) 児童生徒の理科教育を高めるため、実
 験を主体とした学習の過程を通して、実験
 方法や態度を身につけ、科学に対する興味
 と関心を深め、研究心を増進していくこと
 をねらいに小中学生の理科実験学習を年間
 を通して実施している。

(2) 小中学校現職教員の理科実験技術を高
 めるために、実験学習を主体とした教育講
 座を開催している。

(3) 一般市民の科学知識の向上を図るため
 の科学実験学習、講座、観察会等を開催し
 ている。

展示ルーム 青少年並びに一般市民の科学知識の普及啓
 発と科学機器の理解を深めるため、各種科
 学模型機器と産業関係の模型を展示し一般
 の観覧に供している。

研 究 本年度計画としてプラネタリウム補助投影
 機の開発研究が行われている。

会 員 館 園 の 消 息

一部会員館園各館長の人事移動がありましたのでお知らせしま
 す。

山形県立博物館 前館長結城嘉美 新館長佐藤信一・**東京農工大
 付属繊維博物館** 前館長大野泰雄 新館長佐々木清文・**国立通信博
 物館** 前館長関野与八 新館長二宮健・**川崎市立青少年科学館** 前
 館長小塚久良雄 新館長浅尾正昭・**神奈川県立博物館** 前館長土屋
 武人 新館長高橋繁蔵・**横須賀市博物館** 前館長羽根田弥太 新館
 長大平辰秋・**佐賀県立博物館** 前館長古賀秀男 新館長大園引・**神
 奈川青少年センター** 前館長足立原茂徳 新館長大胡満寿男

あとがき

全科協ニュース(通巻第19号)をお届けします。会員館園の皆さんには、ご投
 稿などご協力をいただいておりますが、
 今回その数が少なく4頁にまとめさせて
 いただきました。

周知のとおり、このニュースは会員館
 園職員皆様の連絡誌でもありますので、
 科学博物館の運営に役立つ内容であれば
 どの様な記事でも結構ですからお気軽に
 ご投稿くださる様、なお一層のご協力を
 お願いします。